

英国登山評議会（BMC）国際ウィンターミーティング報告

2月23日～3月2日まで、英国登山評議会(BMC)が主催する「国際ウィンターミーティング」英国のスコットランドで開催され、協会から馬目弘仁と横山勝丘の2名を派遣した。

BMCと日山協の交流は1980年に始まる。当時、新たなロッククライミングの波が本邦にも押し寄せており、1977年から始まった「岩登り競技会」の上位入賞者を中心として9月に高橋善数監督、戸田直樹コーチ、選手として檜谷清、西村晶、古川靖彦、木本哲らが派遣された。その後、BMC代表団を受け入れ冬の谷川岳一ノ倉沢に登ったりした。今回久しぶりの派遣となった。以下は馬目の報告である。

今年度のウィンターミーティングに派遣していただいたこと、まず心より感謝申し上げます。生涯忘れられぬ素晴らしい経験をすることができました。

さて、インターナショナルなミーティングとは言っても実際の内容は「スコットランドのウィンタークライミングをとくと味わってくれ！」という主張がはっきりと伝わるクライミング三昧の毎日でした。彼らの自負と誇りを十分に感じることもできた素晴らしいホストクライマー達と登り、各国のゲストクライマーと語らった5日間の報告をさせていただきます。



カーンゴームズでのクライミング

初日から続けて2日間は雨だった。通ったエリアはカーンゴームズという。赤っぽくてしっかりした岩質で柱状摂理となっていてクラックが良く発達している。ハングこそ少ないものの傾斜は結構強い。

ホストクライマーのロブ（職業：山岳ガイド）は、私達をスコットランドグレードVIのルートへいきなり連れて行ってくれた。本降りの雨に打たれながらビレイの用意をしつつ「これからホントに登るの。冗談だろ!？」という気持ちだったが、平然とギアをラックするロブに、これがスコットランドのフルコンディションクライミングかと胆を抜かれた気分だった。もしやと思ってザックに積めてきたレインウェアが大変役に立った。噂通りの記録的な暖冬のせいだろうか、ミックスクライミングエリアといっても氷は殆ど無くドライツリーリングでの岩登りに終始した。それでも豊富にあるクラックにプロテクションがしっかり取れるしアックスもバッチリ決まるのでプレッシャーは少ない。緊張したのは最初だけで楽しんで足慣らしすることが出来た。ちなみにこちらでは雪や氷が無くてもアックスを使って登れば全てミックスクライミングと表現するらしい。とりたててドライツリーリングという単語は使っていないようだった。

登った後のティータイム、「君は残置ピトンを全く使わずにリードしていたが何故か理由があるのかい？」とロブに尋ねられた。一瞬聞き間違えたのかと思ってしまったが意外な質問内容に驚かされたものだ。

ここ3年の間、私は国内でのアルパインクライミングでは残置プロテクションは無視し、全てを自分でセットして登っていた。プロテクションのセットはクライミングの楽しみの要素の1つだし、それが理想のスタイルだと思っていたからだ。その時私は少々自慢げに自説を述べたものだった。

ロブは残置プロテクションを使うことにはあま

りこだわってはいないようで、自己責任において使ってもいいんじゃないかという寛容な態度であった。クライミング倫理に厳しくストイックなイメージのスコットランドで、意外なことを聞いてしまったなという思いがはじめにはあったが、彼との付き合いが深まるにつれ少々の驚きとともにそんなものかなとおだやかに受け止めることができた。

もちろんスコットランドのクライマーはピトンやナッツを積極的に残置するなどという愚行はしない。またカーンゴームズは完全ボルト禁止でもある。残置といっても、回収不能に陥ったアングルピトンやナッツといったもので、1Pに1個位の割合で目にする程度だ。

待望のベン・ネビス (1,344m)

3日目、待望のベンネビス初体験となった。ルートはアルバトロス (VI、5)。壁には目印となる残置物など一切無く、ラインは目の前の壁に垂れるベルグラを追ってゆくようだ。しかし出だしの氷は厚さが4~5cm位と大変薄そうな感じだし、上部には黒々したハングが控えている。プロテクションは取れるのだろうか.....。ルートの取り付きで、ロブに「1P目、行っていいよ。」と言われたときには久しぶりに緊張した。この先ラインを決める主体はあくまで私自身だ。先程までスタートポイントを探すのにトポと睨めっこしていたことが嘘のように意識から消えていた。期待とドキドキ感を胸にアックスを振るうが、5mも登りだすともうしっかり集中しつつ存分に楽しんでいる自分がいた。

アルバトロスが開拓されたのは1978年。29年後の今日、こうして自身がこのルートと対峙してみよう。ルートは初登攀者の作品であって、そしてそれだけではないんじゃないかと。今日でも変わらずに壁が与えてくれた一筋の煌きを感じることができたことに感謝したい。

ベンネビスの頂上にダイレクトに突き上げるこのルートは最後に雪庇を乗り越えるとまっ平らの別世界に飛び出す。陰鬱な北壁から輝く陽の下



へ！最高のロケーションだ。自分は「今、最高に幸せだ。」と心の底から感じていた。私はロブと抱き合っ、この感動と感謝の気持ちを伝えた。頂上には多くのクライマーがいて賑やいだ雰囲気だ。皆それぞれにクライミングの興奮を分かち合っているようだった。しばらくしてピート（職業：イギリス陸軍山岳部隊の教官）と横山君が後続してきた。ベンネビスで快晴なんてとても珍しいこの日だ。このような日に初クライミングなんて本当にラッキーだ。隣のルートに登ってきたという老クライマーに聞かれたので、登ってきたのはアルバトロスだと言うと、「エクセレント！実に素晴らしいルートだ。」と喜んでくれた。私はもうヒマラヤの高峰の頂上にでもいるかのごとく有頂天となってしまった。

やはりトラディショナルクライミングは素晴らしい。今回参加した各国のクライマー全てが口にした言葉だ。まさに「Excellent!」トラッドルート万歳だ。ブラボー！！

トラディショナルクライミングエリア（カーンゴームズ、ベンネビス）では、トポをみるとあみだくじの様にラインが引かれている。各ルートの間隔も近接していて少々面食らう。スタートが同じで途中から枝分かれするバリエーションルートも多い。スコットランドの岩場は完全にゲレンデとなっている。スタート前にトポをじっくりと眺め、ルートを確認してから登りだす様子は日本のフリークライミングエリアでのそれと大差ない。しかも夏と冬のルートが混在している点など



は日本の山の壁と趣が大変よく似ているとも思う。

このように決して広大とは言えない規模の岩場で、長い伝統を誇りながら現在も各国のクライマーから注目され一度は行ってみたいと思わせる魅力の源はどこにあるのだろうか。私は、その厳しい倫理観に基づくクライミングスタイルにあるのだろうと思っていた。岩の形状を大事にすることにその真髓があって、それを端的に表現した行為の最たるものが「ボルトレス」という掟にあるのだと。思い込みによるものだが自分のなかでは、トラッドクライミングの聖地というイメージがすっかりできあがっていた。

さて、では実際にスコットランドにボルトルートは全く存在しないのだろうか？答えは、否であった。ボルトルートは特別なものではないし、しかも積極的にチッピングして造ったルートまでもが存在していた。

チッピングルートの衝撃

4日目、衝撃のその日は大荒れの天気朝から本降りの雨だった。「これからミックスクライミングのゲレンデに行くが君たちもどうか？大きなケイブがあるので雨でも登れる。」という誘いに気楽にのった。着いてびっくり、前衛の小さな壁にせせこましくボルトが打たれているではないか。日本の城山より近い。あまりにも興味が湧かず早々にケイブの方に行ってみたのだが……。岩質は頁岩、発破の跡が生々しく残っておりこのケイブ自体が人工構造物のような雰囲気だ。威圧的な前傾壁（130度位）に拓かれているルートはプロジェクト

を含めて4本。右奥のルートがM10のルートだそうので早速トライしてみた。フッキングエッジの8割は削って造ったと明白にわかるもので「これでいいんだろうか！？」と疑いたくなるようなルートだった。ケイブの入り口にはフリークライミングルートもあり、8bとグレーディングされたそれにはドリルでくり貫かれたポケットホールドが続いている。私たちは非常に驚き、見たくないものを見てしまった時のような苦い思いが込み上げてきてものだ。何故だ？とんでもなく不可解な問題を突きつけられたような気分させられてしまった。

この日のホストは、デイブ・マクロード。ロブが「スコットランドで最も優れたクライマーだ。」と誇らしげに評する彼は、28歳の若手オールラウンドクライマーだそうである。

2006年度に、Climbing誌からトラディショナルクライミング部門でゴールドピトン賞を受けた世界的に有名なクライマーで、世界最難のトラッドルート Rhapsody(E11 7a or 5.14c)を初登。そのトライの様子は夜のゲストプレゼンテーションでの映像で十分に堪能させてもらったのだが、トライ中にどう見積もっても30m以上の墜落を繰り返している。当然ボルトレス、激しいロングフォールにナッツのワイヤーがぶち切れるシーンもあって迫力満点だった。そしてさらに前述のケイブのルート（8b）のフリーソロシーンまでもがあった。

トラッドとスポーツ、全く違うジャンルのクライミングをどういう心境で続けているのだろうか？私達の質問には、「それぞれをクライミングとして楽しんでいる。特に分けて考えてはいない。」と答えてくれた。ショッキングな体験ではあったけれども、これから日本のクライミングを考える上で大きな示唆を与えてくれた一日だった。

新ルート開拓

最終日に再びベンネビスへ登りに行くチャンスに恵まれた。今回は、デイブと新ルート開拓にチャレンジするという得難い体験をすることが出来

た。彼は、核心と目された3P目のリードを私に譲ってくれた。しかしやる気まんまんでトライしたもののどうしても超えられない。泥の詰まったコーナクラックを微妙なフッキングで身体を持ち上げるのだがハングしている上にスタンスが乏しい。そしてセットしたプロテクションがなんともお粗末、墮ちたらかなり酷いことになるのは確実だ。幾度か試してみたのだが結局クライムダウンしてデイクにリードを交代した。さてデイクは長い時間をかけてプロテクションを丁寧にセットし、クライムダウンを繰り返しつつもハングを超えていった。途中何度も「ファック！」を連発しながら奮闘している。抜け口の氷がグサグサでまたなんとも危ないムーブの連続だったようだ。フォローした僕達はあえなくロープにぶら下がる羽目になったが、スコットランド最高のクライマーの熱い登りを見ることができて魂が熱くなった。彼曰く新ルートグレードは(VIII,8)だそうだ。

予想以上にデイクはプロテクションにはかなり慎重なクライマーだった。大きいサイズのアングルやロストアローなど私がここ数年来持ったことがないピトン類を用意していた。またヘキセントリックも多用する。その理由はいたって実用的なものである。ここのベルグラがつき易いクラックではカムが全く効かない場合がある。ヘキセンやナッツはアックスのピックで丹念に叩き込んでいた。自分はあの時思い止まって正解だったとホッとしたものだ。自分はプロテクションのセットが未熟だった。表面的な情報よりも自分で体感することがとても大事だ。氷の粘り具合、岩の硬さ、



ピトンと岩の馴染み具合など実際に経験してみないとつかめないものがある。ベンネビスにはそこを登る独特のテクニックがあるのだ。大胆な挑戦も大事なことだが少しずつ段階を踏んでいくことの大切さを改めて思った。これからも海外に登りに行く際はこのことを忘れないよう胆に命じておきたい。

まとめ

あつという間に終わってしまった5日間のクライミングだったが、その短い体験をもとに考えたことを述べてまとめに代えさせてさせていただきたい。

スコットランドのクライマーは「倫理」に縛られて登っているのではなくて「伝統」にのっとって楽しんでいるのだろう。直感的に感じたことなのだが実はとても的を得ているのではないかと考えている。

トラディショナルクライミングエリアでは「ボルトレス、クリーンクライミング、フリークライミング」といたってシンプルなスタイルに基づいて登っている。後者の2つは可能な限り追求してゆくべき理想であって言わば最大限の努力目標。だが前者のボルトに関しては全くもって単純明快、以前から誰も使ってこなかったしこれからも使うことのない不要なものなのだ。そしてそれはもはやルール（意識し、自らを律するもの）ですらない。「ベンネビスやカーンゴームズは未来永劫ボルトレス」ということは当たり前すぎて標語にする価値もないのだろう。グレードを押し上げる努力は大事なことだが、あえてボルトを導入してことを成そうとは考えない。何故ならそれは伝統であるから。そしてその伝統こそが誇りなのだと思う。試みるべきは新しいスタイルではなく新たなラインなのだ。ベンネビスの壁はマニアックで重箱の隅をつつくようなクライミングと揶揄されても実際色あせるどころか輝いてすらいるではないか。ゴールドクラシックルートの1つ、Tower Ridgeが冬季初登されたのが1894年。100以上経て未だに新ルートが開拓され続けている。壁に残

置物が無ければどれ程ルートが追加され続けようとも壁は変わることなくそこに在り、私達はいつまでも自由に登ることが出来る。

一方でスコットランドのクライマー全てが、「岩場でのボルト使用」を否定している訳ではなかった。ロブやデイブを含め若い世代はかなり自由にクライミングを楽しんでいる。決して原理主義者というわけではない。「ボルト」というものの存在がクライミングに与える影響があまりに大きいものであるがゆえに、そのハードルを越えてしまった岩場では何でも有りという感じになってしまうのだろう。かなり確信犯的に割り切ったルート設定がなされているのもそう考えると得心がいく。それぞれのスタイルを楽しんではいるが完全にジャンルの違うものとして分けて考えているのだろう。

ちなみにトラディショナルクライミングエリアでは冬と夏のルートとでそれぞれにスコッチグレードがつけられている。例えば私たちがベンネビスで登ったアルバトロスは (VI,5)、前記のデイブが初登したルート「ラプソディ」は (E11,7a) とルートの難易度とピッチまたはムーブのそれを併せて表記している。それに対してボルトルートはミックスでは M グレード (M10)、フリーではフレンチグレード (8 b) を使っている。

伝統はいかにして伝承されるのだろうか。それはクライマー個々人が守るものというよりは、そのエリアごとに根付いている思想という解釈が合っているように思う。エリアごとの伝統こそが大事であって一般論的な倫理項目 (ボルトやチップングの問題) よりもまず先にある。ベンネビスの素晴らしさを保ちながら一方では実験的ルート開拓によって流行のクライミングも行なわれている。スタイルはエリアごとによって決まっているという完全なまでに分離したあり方がスコットランドの素晴らしさを保っている重要な鍵なのだ。これは実に日本の現状に示唆を与えてくれる。ボルトルートとトラディショナルルートは共存できるのか否か。かのアメリカのヨセミテの現状を見れば



わかることだ。私は限りなく不可能に近いのではないかと思う。今注目を浴びている錫杖岳前衛壁もその点では先行きの舵取りは大変難しいだろう。どう共存をはかるのか、今まさに日本のクライマーの知恵が試されている。

ボルトを否定することは私には出来ない。ボルトルートもとても楽しいものだ。ただ私に言えることは、日本にもどこか1つくらい完全なトラディショナルクライミングエリアがあってもいいと思う。フリークライマーが見向きもしない岩も危ない山岳エリアならなんとかならないだろうか。今そのために有志で何らかのアピールができないかと考えている。

「British Style」。イアン・パーネル氏のスライダーショーのオープニングタイトルだった。これがしびれるくらいにカッコ良かった。「Japanese Style」。いつか世界のクライマー達に自信をもって紹介できる日がくることを願っている。日本の冬壁はスコットランド以上の魅力を秘めている。要は私達自身の問題なのだろう。